

# 乳用種牛肉をめぐる産消提携の現段階 －鳥取県の産直「東伯牛」を事例として－

別府大学国際経営学部 中川 隆

## 要 約

本稿では、鳥取県の産直「東伯牛」を事例に乳用種牛肉をめぐる産消提携の現段階と課題について検討した。近年、沖縄や佐賀などにも産直取引を拡大させている。また、全農安心システムを取得するなど、乳雄肥育現場では新たな取組も行われている。1986年にエフコープ生活協同組合と東伯町農業協同組合との間で産直協定が締結され27年が経過するが、その絆は、関係者の弛まぬ努力により、ますます強固なものになっている。

一方で、以下のような課題点も明らかになった。生協組合員の代替わりが進み、大手量販店との価格競争を余儀なくされる中、ともすれば当初の産消提携の理念が薄らいできている面もあり、如何に次世代にその理念を継承していくかということである。また、素牛は質、量とも問題なく導入されるが、安定した価格での供給が望まれている。肥育段階では、近年の飼料穀物価格の高止まりで、飼料費が嵩んでいる。委託契約生産農家の高齢化も課題である。

## はじめに

鳥取県の中西部に位置する琴浦町内で生産されている東伯牛は、牛肉の輸入自由化への対応の一手段として、かねてブランド化が図られ、福岡県のエフコープ生活協同組合などと産消提携が築かれてきた。

本稿では、TPP など国産牛肉をめぐる情勢が厳しい局面にある中、鳥取県の産直「東伯牛」を事例として、乳用種牛肉の産消提携の現段階と課題を検討する。

### 1. 産直「東伯牛」の取組みの経緯

東伯牛の産消提携の取組みは、1986年8月22日、福岡県のエフコープ生活協同組合（以下、エフコープ）と東伯町農業協同組合（以下、東伯町農協）の間で、「協同組合間提携と産直活動に関する協定」が結ばれて以降のことである。93年4月からは、セット肉を生産費積み上げ方式による再生産価格で納品することで、当該牛肉の安定生産を図ってきた。エフコープ・肥育農家・東伯町農協が一丸となり、素牛農場や飼養管理、飼料給与体系などについて協議を重ね、生協組合員から支持される東伯牛の生産を行ってきた。

2007年2月1日、東伯町農協と鳥取中央農協との合併に伴い、乳雄肥育生産事業は（株）西日本ジェイエイ畜産が継承している。また、同年9月、「鳥取畜産絆の会」が設立される。直接、生産者と消費者が対話できる年4回の会合や生協へ

出かけ産直牛の学習会などを開催し情報交換を行っている。

さらに、コープおきなわとは2008年7月に東伯牛の最初の納品があり、同年9月に全店舗での納品を開始している。2009年12月に東伯牛産直調印式が行われている。2012年11月には、コープさが生協との取引も開始するなど、産消提携事業を拡大させている。

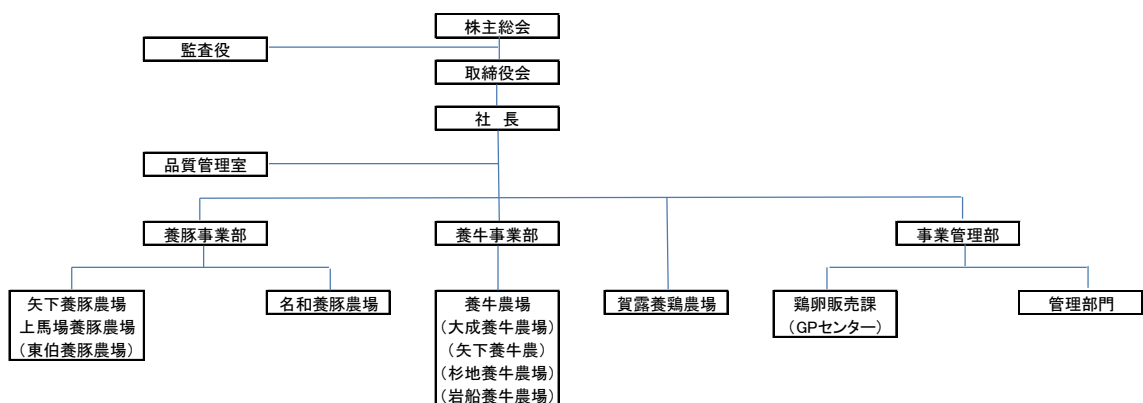
現在、東伯牛の飼育管理に携わっている生産者は、以前から東伯牛や和牛肥育に携わってきた農家である。(株)西日本ジェイエイ畜産がその生産者に飼養管理を委託し、東伯牛の生産を行っている。産直3原則(①どこで誰が生産したか分かる、②どのように生産したか分かる、③消費者と生産者が互いに交流できる)に則り、生協組合員・職員、(株)西日本ジェイエイ畜産および全農ミートフーズ職員が、福岡・沖縄と鳥取を行き来し、学習会等を通じ産直交流を深めている。

## 2. 株式会社西日本ジェイエイ畜産の産直「東伯牛」生産の取り組み

### (1) 株式会社西日本ジェイエイ畜産の経営概要

株式会社西日本ジェイエイ畜産(以下、ジェイエイ畜産)は1998年、全農畜産サービス株式会社(全農の100%出資子会社)の出資により設立された企業であり、畜産物生産(採卵鶏・養牛肥育・SPF肉豚生産事業)を担当している。従業員数は45名(パート除く)である。資本金は2億6,000万円である。2007年1月、東伯町農協から養牛肥育事業と養豚生産事業を継承している。ジェイエイ畜産の組織図を図1に示す。

図1 株式会社西日本ジェイエイ畜産の組織図



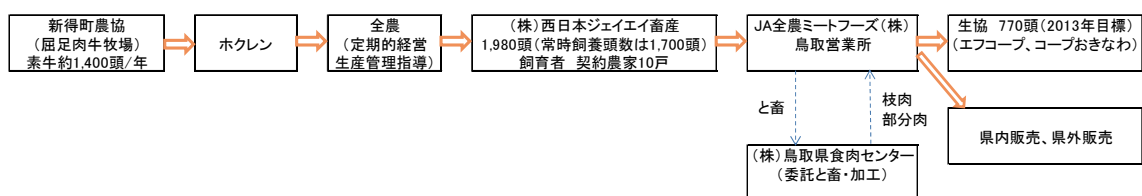
資料：株式会社西日本ジェイエイ畜産資料を基に作成。

### (2) 養牛事業の実態

ジェイエイ畜産の養牛事業(乳雄肥育生産事業)の実態を検討する。肥育素牛

は、北海道新得町農協管内の屈足肉牛牧場からホクレンを介し全農経由で導入している。年ごとの素牛導入頭数の増減はあまりない。ジェイエイ畜産での飼養頭数は1,980頭（常時飼養頭数は1,700頭）である。2013年は1,365頭の出荷を予定している。出荷先は全量、JA全農ミートフーズ（株）鳥取営業所である。併設されている（株）鳥取県食肉センターで委託と畜・加工され、コープ九州（エフコープ、コープおきなわ、等）や県内外に出荷される流れである。県内では、東伯牛は、鳥取東伯ミート株式会社を通じて、小売店で販売されている（図2）。以下、東伯牛の流通段階別にみた取り組みの実態を検討する。

図2 株式会社西日本ジェイエイ畜産における「東伯牛」養牛事業のフローチャート



資料：株式会社西日本ジェイエイ畜産資料を基に作成。

### ①肥育素牛の導入

肥育素牛の導入先は、上述のとおり、現在、北海道の屈足肉牛牧場（飼養頭数1万1,000頭で、乳雄と交雑種の哺育・肥育一貫経営を行う大規模経営）である。2013年度の導入予定頭数は1,404頭（約120頭/月）である。旧東伯町農協の時代は、新得町農協管内の他の幾つかの農場や県内からも導入していた。ある程度の肥育生産規模となれば、均一化した質の素牛を導入する必要がある、導入先も一定程度の規模が求められる。これが屈足肉牛牧場から素牛を導入する理由である。

また、素牛の輸送は、事故防止に配慮し、牛の扱いに長けた家畜輸送専属のドライバーにより行っている。生後約7ヵ月の300kgを超える素牛を26～27頭/10t車で3日間かけて月4.5回輸送している。素牛の導入時期および体重は全国平均（6ヵ月、280kg）と比べ長く、また重い。

### ②肥育生産事業

ジェイエイ畜産では、琴浦町（県中央に位置。人口1万7,880人（2013年7月現在））に立地する鳥取中央農協の4農場を借り、東伯牛の肥育を行っている。飼養管理を行っている生産者は、以前から東伯牛や和牛肥育に携わってきた10戸の農家であり、ジェイエイ畜産による委託契約生産（毎年更新）により、肥育を行っている。表1に上記農場における契約農家数・飼養規模・肥育畜種を示す。

表 1 東伯牛肥育農場における契約農家数・飼養規模・肥育畜種

	矢下農場	杉地農場	岩船農場	大成農場	計
契約農家数(戸)	1	3	1	5	10
飼養規模(頭)	180	600	200	1,000	1,980
畜種	乳牛去勢	和去・乳去	乳牛去勢	乳牛去勢	

資料：株式会社西日本ジェイエイ畜産資料を基に作成。

契約農家の1戸当たり飼養規模は100～400頭と家族労働人数により異なっている。2013年9月現在、杉地農場のみが和牛肥育も行っている（2013年12月で和牛の肥育は終了）。矢下農場では、かつては540頭ほど飼養していた。

### ③ 給与飼料および飼養管理内容

東伯牛の各肥育ステージ(前・中・後期)の給与飼料の特徴は次のとおりである。

- 1) 肥育前期(4ヵ月は、素牛で導入された子牛には、健康に育てるため、骨格や内臓が丈夫になるよう粗飼料(乾草・稲わら)を中心に給与する。
- 2) 肥育中期(5ヵ月)では、粗飼料とのバランスに配慮し、濃厚飼料(配合飼料)を段階的に増やし、肉量(体重)を増加させる。配合飼料は、JA西日本くみあい飼料(株)の飼料工場で配合割合を指定した「東伯ホルス」を使用している。
- 3) 肥育後期(6ヵ月)では、肉の旨みとなる「あまさ」を増やす目的で「びーふあっぷ」(甘藷の粉末が成分の1つ)を給与し仕上げている。

また、稲わらは品質の良いものの確保に努めており、鳥取県産も一部使用している。牛床の敷料(オガ粉)は近隣の木材加工施設から調達したものを使用している。堆肥は鳥取中央農協みどり有機課で堆肥化处理を行い、田畑・果樹園・山林に還元しており、地域資源循環を推進している。

東伯牛は肥育期間約15ヵ月を経て出荷され(生後月例は約22ヵ月)、通常(12～13ヵ月)より長い。出荷時の枝肉重量は480kgを超える(生体重量は約870kg)。



大成農場で肥育される東伯牛



肥育後期に給与される「びーふあっぷ」

次に、東伯牛の飼養管理内容の主な特徴は次のとおりである。

- 1) 飼料は毎日定まった時間に給与する。
- 2) 水槽（牛の飲水用）の掃除を毎日行う。
- 3) 敷料は、上述のように県産オガ粉も使用し、牛床の安楽性にも配慮し、交換する。オガ粉の使用は1頭当たり約10 m<sup>3</sup>が適当で、代え過ぎは良くないと考えている。
- 4) 徹底した健康観察を行い、牛を飼養する。
- 5) 防暑・防寒対策を行い、牛が過ごしやすい牛舎環境をつくる。

牛房のスペース（5頭分）は4m×8mで統一されており、肥育農場には45頭牛舎（9房）と50頭牛舎（10房）、100頭牛舎（20房）がある。

東伯牛の飼養管理の基本は、牛にストレスを与えないことである。飼料給与後は、ゆっくり横臥させ、甘藷の旨みが入った美味しい肉を作る。このように、カウコンフォートにも十分留意し、安全で良質の東伯牛を生産すべく飼養管理を行っている。

#### ④生体出荷・と畜解体の実態

東伯牛の出荷は、牛に物理的なストレスを与えない頭絡（とうらく）による出荷である。JA全農ミートフーズ鳥取営業所（鳥取県食肉センター）への出荷実績（2012年度）は、1,441頭である。コープ九州への出荷頭数は770頭（2013年度目標）である。数年後には、これを1,000頭にすることを目標にしている。また、生協との飼養管理の取り決めで、一度でも抗生物質を使用した牛は、生協には出荷しない。このため、上記の健康観察とも関わるが、健康上問題のある牛の早期発見に努めている。と畜される直前の牛は、鳥取県食肉センターで牛に配慮した（特に夏季では、換気扇やミスト設備の整った）環境の専用の係留場で過ごすこ

とになる。同センター内でのと畜解体は、ジェイエイ畜産の出荷牛から順番に行われる。

ちなみに、東伯牛の3等級比率は、以前から全国平均を大きく上回っており、現在10%（全国平均は4%）である。生協（コープ九州）には3等級の牛を、2等級でも「上」のものを優先的に出荷している。

#### ⑤全農安心システムの取得

産直「東伯牛」肥育生産の安全・安心を担保するため、2010年3月には、全農安心システムを取得している。生協との契約通りの飼養管理、医薬品の管理等がなされているか、全農が委託した第三者機関が検査および審査を行っている。

### 3. 当面している課題と展望

本稿で検討してきたように、産直「東伯牛」は「北は北海道から南は九州・沖縄まで」多くの関係者が携わり、互いに緊密に連携することで成り立っている。産消提携の開始後、27年が経過し今日に至るまで、その絆を深めてきた。一方で、生協組合員の代替わりが進み、生協が大手量販店との価格競争を余儀なくされる中、ともすれば当初の産消提携の理念が薄らいできている面もある。如何に次世代に産消提携の理念を継承していくかは大きな課題である。

素牛段階では、北海道の素牛供給体制の安定化が課題である。素牛は質、量とも問題なく導入されるが、コスト的に厳しく価格として安定することが望まれている。

農場段階では、近年の飼料穀物価格の高止まりで、飼料費が嵩んでいる。また、委託契約生産農家の高齢化も課題である。

追記：本稿を草するに際し、調査に御協力を頂いた鳥取県農林水産部畜産課、株式会社西日本ジェイエイ畜産、およびJA全農ミートフーズ株式会社鳥取営業所の各関係者に対して、記して感謝の意を申し上げたい。

#### 参考文献

- 〔1〕 安部新一「東伯牛（鳥取）とエフコープとの産直取引への取り組み―北海道新得町から鳥取、さらに福岡へと南北を絆で結ぶ産直事例―」農畜産業振興機構『畜産の情報』2009年1月
- 〔2〕 株式会社西日本ジェイエイ畜産資料、2013年
- 〔3〕 中川隆「組織間連携強化による情報格差解消と共生関係の構築～流通業者Aと量販店Bの意向調査をふまえて～」日本食肉消費総合センター『乳用種牛肉が当面する課題（提言）』2013年、pp. 37-40.